

全力で生きる

「親がプレゼントした名前。」

清瀬市「命の週間」における清瀬中の講演会。講師の日笠智之（ひがさともゆき）先生から飛び出したその一言が、会場の空気を一瞬で変えました。

全国中学校バレーボール大会優勝 5 回、U15 バレーボール男子日本代表監督を 13 年歴任した伝説の指導者。今年も全国大会に出場しました。しかし、日笠先生が注ぐ情熱はコートの上に留まりません。勤務校である瀏江中での運動会の組み体操、一糸乱れぬ集団行動、そして劇団四季の団員が視察に訪れたという文化祭の本格ミュージカルまで——先生が向き合う全ての場所に、魂震える「全力」がそこにありました。

誰もがその熱い語り口に引き込まれていきます。ヤンチャだった青春時代、教員になってからの日々を生徒たちは爆笑。そうかと思えば、「都大会に行きたい」と願う生徒たちの想いに応えられなかった悔しさ、それを乗り越えて掴んだ都大会初優勝。自分が一番変わったと日笠先生は言います。



トークに続いて動画の上映。映し出されたのは、瀏江中学校の生徒たちの姿でした。崩れそうな 5 段タワーを、怪我をさせまいと全身で支え合う仲間たち。我々がそのすさまじさに驚いていると、年は進み、コロナ禍へ。中止になった運動会を嘆くのではなく、生徒達はやれることを考えた。答えは、密を避け、距離をとりながら全身全霊の声を絞り出し、医療従事者へ全力でエールを届ける。文化祭、ミュージカルの練習で何度も何度も壁にぶつかり、本気の涙を流した主役。その真に迫った演技に、日笠先生が「10 点……10 点満点中だ!」と告げた瞬間の、静まり返った空間から広がった安堵と感動。そのシーンの解説に「全

力の努力が、別格の演技を創り出す。」と日笠先生の声が清瀬中生に響きました。

得点を決めたバレーボール部の選手たちは、コート内ではなく応援席に向かって喜びを爆発させます。コートに立てなかった仲間の想いも背負い、共に闘っているからなのです。卒業式、コロナで卒業式に出席できなかった友のために、生徒たちは全員で声を張り上げて「ハイ」と。体を前後に揺らしながら誰一人手を抜くことなく歌う校歌に、彼ら彼女らの「全力」の絆が宿っていました。

「全力」物語は、先生自身の原点へと遡ります。かつて、何事にも中途半端に適当に生きていた高校時代、担任の先生に連れられて行った重度の障がい者施設でのことでした。本を読むこともできないマサル君を見て、思わず「かわいそうだな」と漏らした日笠少年に、担任は雷のような言葉を浴びせました。「マサルは本を持つことを覚えたんだ。ちっともかわいそうじゃない。五体不満足でも今できる精一杯を全力で生きているんだ。のんびんだらりと生きているお前のほうが、よっぽどかわいそうだ!」この言葉に日笠少年は衝撃を受けます。さらに「お前は選ばれた人間だ。周りの人を幸せにできるために生まれて来たんだ。」と続きます。その夜、この出来事を報告した祖母から知らされた衝撃の事実。日笠先生自身、へその緒が首に巻き付き、逆子で前置胎盤という絶望的な状況で生まれました。それは、麻酔を使えば「母か子の命が」——選択を迫られた母は、両手両足をベッドに括り付け、麻酔なしで帝王切開に挑む道を選んだといひます。我が子の誕生のために、母が命懸けて繋いでくれた生命でした。

数億個もの精子の中から、卵子に辿り着くのは 100 個前後。確率は、約 0.001%。その中の 1 個が卵子と受精できる。その確率は更に小さく。「だから君達はスーパースターだ。奇跡なんだ。」と日笠先生の言葉が熱くなっていきます。

講演の結びに H22. 7. 7 付の日笠先生の学級通信を皆さんに配布しました。病と闘い苦しい時も笑顔を絶やさず、仲間を鼓舞し続け 18 歳で生涯の幕を閉じた卒業生ひとみさんについて描かれた『ありがとう。ひとみ。』にはこう記されています。「私たちが悩んでいることは全て自分の努力で乗り越えられる壁・全ていいわけだった。しかし彼女は乗り越えることのできない運命の壁に家族とともに立ち向かった。」

「親がプレゼントしてくれた名前」それは、命のバトン。奇跡を受け取った瞬間から私たちは全力で泣き、全力でミルクを求め、全力で大好きな人の腕の中で眠りにつきました。いつの間にか忘れていた『全力』を、日笠先生は全力で思い出させてくれました。今という瞬間を全力で生き抜くこと。それがスーパースターとしてこの世に誕生した我々の使命です。全力で語っていただいた日笠先生は今も昔も輝き続けています。

全力のスーパースターの周りには、いつでも 陽が差 すのです。

